

# 大道寺幸子基金のこと

## 死刑囚の作品にふれる

### 死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

東京拘置所は、本来、「逃亡や証拠隠滅のおそれのある」裁判中の人の身柄を拘束するための施設です。しかし、事件を「自分がやった」と認めない人たちは、どんなに微罪であってもほぼ例外なく逃亡や証拠隠滅のおそれあり、として釈放が認められず、拘禁され続けます。「人質司法」と言われるゆえんです。

また、死刑判決の確定した方たちも収容されています。現在、四〇人を越す死刑確定囚が生活しています。その中に、連続企業爆破事件の大道寺将司さんや益永利明さんがいます。二人は、殺意をもって行なった事件ではないことを訴え再審請求を行なっています。

☆☆☆

大道寺幸子さんは将司さんのお母さんです。息子ばかりでなく、多くの死刑囚、獄中者と面会し、励まし、「生きて償う」ことを共に模索し、さまざまな場で死刑制度の問題を語り続けてこられました。その幸子さんが二〇〇四年五月一二日に亡くなられた後、ご遺族の申し出により、遺された預金を基金として、死刑囚の再審に必要な経費や死刑囚の表現展を開催するために使わせていただくことになりました。

☆☆☆

昨年行なわれた第一回表現展の募集には、文芸作品や絵画・イラスト作品が多数寄せられた中、『死刑囚物語』（澤地和夫さん・東京拘置所在監）、『こんな僕でも生きていいの』（河村啓三さん・大阪拘置所在監）の二作が優秀賞に選ばれ、それぞれ出版されるはこびとなりました。『死刑囚物語』は、東京拘置所の死刑確定囚の現在の処遇を社会に伝える有意義な作品として選考委員の作家の加賀乙彦さん（精神科医として東京拘置所で働いた経験もお持ちです）が強く推薦された作品です。

☆☆☆

今年も、一〇月七日（土）、裏面（HPでは省略させていただきます）に紹介した集会で、新たに寄せられた作品が紹介されます。無心になって取り組んだことがうかがえる絵画作品、文学としては稚拙であってもストレートに思いをうたった詩や短歌作品など、死刑囚の表現にふれることは、その存在、その内面にふれることにもなるでしょう。ぜひお出かけください。

☆☆☆

大道寺幸子基金は一〇年間続けられる予定です。その間に、日本の死刑制度が廃止されることを願っているとのことです。